毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)　①

山と博物館

第5巻第9号　1960年9月25日　大町山岳博物館

木に登ったハタネズミ

ハタネズミは木に登るといわれているものでそれを実験的にやって見て成功したものです。

撮影　国立科学博物館　小林峯生氏

アピ登行記 (1)

同志社ヒマラヤ遠征隊
平林克敏

今度の遠征くらい期日におわれた遠征は、他にないと思う。ヒマラヤへ小さな探査とか学術調査ならともかくとして、7000米の巨峰アピに登るには、まったく劇的な仕事だった。

12月25日に大町を 8時30分の準急で上京し、それから 3ケ月の間にすべてをやらねばならなかった実際のところ正式な外貨枠が決定し渡航手続をしたのは 1月26日である。ヒマラヤに行く事を夢見て何度も申請した事のある書類、手続、方法は、なんとか解かっていたので誰れの手もかりずにすべてを進めた。

マナスル遠征以後今日まで、つるべ縄式の、ヒマラヤ遠征の伝統を、まもり続けているのは、私には少なからず不満が有った。つまり、マナスル探査をきっかけに、ブリガン谷を中心としてヒマルチユリ、ガニシユ、ランタン、ジユガール・ヒマールと、カトマンズ、ポカラの同族が10隊近く日本から入っている、たとえ未登の山があるからといってジユガール、ランタンの谷は止めてもらいたいものである。もっと他にパイオニヤー精神の端を味える場所がある様に思う。

日本人の誰れかが行って来て、写真を見、計画日程まで、そっくりそのまま、インド、ネパール渉外事務関係の仕事の方法もマナスルの時のおぼえが受けつがれ、ワイロを払う所、人まで定っていると云うのでは、山を登る人達の持つ、創進の精神と異るのではないだろうか。大名行列を安泰にお江戸入させる立場の人が多すぎる為か、後から、ついて行く足軽にも似合ぬ、隊員達の不勉強の為か、日本からの遠征の立案、企画には、 3種類の馬が競争している様であるＡＡＣＫを中心とした競争馬にはにつかぬ、ホワイトハウス、カラコラム族と、Ｊ、Ａ、Ｃ（日本山岳会）を中心とした駄馬の様に力強い、マナスル三山族。新入りの競争馬でスタートの時、後ずさりする全日本山岳連盟のジユガール族である。この 3族が、遠征の外貨をめぐって毎年の様に争っている。

その中に地方出の新入りが、たまたま頭を出す。この連中は競争馬ではなく曲芸馬である。自分達のヒマラヤ夢想の為、学術調査に、名をかりて、○○専問の何々博士と云う曲芸馬の後に乗り込み、人参を棒の先につけて走らせる、人参たべたさの馬は重荷の隊員を乗せて調査に出かける。この種族は最近増々多い様である。

ベースキャンプにて

しかし草競馬の天才かたまたま都入りして賞金をかっさらって引き上げる、天才馬が現れたのは今年である。慶応大学のヒマルチユリーと、同志社大学のアピである。同じ様な天才馬でも質的にまったく異っていた様に想う慶応の隊は、高きを困難を、ひそかにみつめるスマートな、遠征隊であった。しかし私達は初めから変っていた高い山と言うより、日本人のあまり入っていない地方、それも自分達の欲求を十分にみたしてくれる僻地にしたかった。

アピ登山許可が降った時、私は何か満たされる様な想いで日本を出発した。

許可がネパールから降っても、かならずしも入国出来る場所ではない事は初めから、わかっていた。つまり戦後外国人の入国を許さないインドのアルモラ以北の特別国

境地帯（インナーライン）をどの様に通交するかと云う事で、頭が痛かった。アピが処女地として、いまだに、のこされているのは、この点に問題があったのだろう。ネパール政府には、ネパール国内を通りアピに行く事が出来るとでたらめの地図を作って申請した。もとよりネパールの様に未知の地方の多い国だけに、あっさり許可してくれたのだが、我々が書込んだネパールの道は絶対に通交出来る様なものではなかった。

さらにインド政府にはネパール国からアピ登山の許可をもらったがネパール内に道は、無いから、なんとか特別国境地区を通してくれる様にとずるく、立廻る事にきめて出発した。

3月1日徹夜一週間で創り上げた荷物約3屯を、神戸港よりサンゴラ丸で出した。

この頃外電はネパール政府が正式に同志社大学遠征隊に許可を下した事を報じた。しかしニユデリーの大使館から外務省にとどき、在インド大使館でビザーを受取るまでには10日以上必要とした。乗船するアイベリヤ号が神戸を立つ 3日前の金曜日、私は伊丹飛行場から羽田へ飛び、外務省で、ネパールから正式許可をまった。しかし夕刻 5時に入った外電を英訳しタイプして、インド大使館に行く事は不可能であったし、おまけに土曜日は休みと言う事になっていたから、インドのビザーはあきらめ、イギリス大使館で香港ビザーをもらい、すべては香港でするか、出発の朝神戸でする以外になかった。

出発1日前の日曜日、徹夜続きの体を飛行によこたえ、大阪に帰り、インド国内で使用したり、ばんさん会に出席する服とか、下着の類をトランクに詰める買物に二人で走り歩た。京阪神に家を持つ隊員がうらやましかった家を出てから 4ケ月一日も休む事なく動き続けた。

出発の朝私は神戸のインド領事館に行き、全員の入国ビザーを受取り、アイベリヤが出港する 5分前に、豪華船のタラップを上った。デッキに出た時は既に、第四トッテから巨大な船体をはなしていた。なんと多忙な毎日であったろう。

カルカッタのタムダム飛行場へ着いた時は 3月19日夕刻11時を廻っていた。ちやっかりした隊員ばかりの我々の隊は、どんなにめんどうな、インド税関でも誰れより早くすませてしまった。むし風呂の様なあつさ、契約したホテルまでの道には、有名なインド乞食が頭を並べて道端に寝ていた。話しでは聞いたが、なんとごそまつな国である事かと、これから半年のインド生活の前途にいやけがさしてしまった。私達の遠征隊は西北インドからネパールに入る為恐しくめんどうな問題が有った。カトマンズの主都へ行きニユデリーに飛んだ。

3月20日　ガルツエンがカルカッタに妻と愛子を伴ってやって来た。我々のホテルに一室を契約しておいたのだが、やはりホテルよりシエルパー間仲の宿が良いと見えホテルで打合せ遊んでは夕刻帰って行く。ガルツエンが来てから、慶応隊のラクパツエリンとかラクパ・ダーノルブ、パサンとたくさんの仲間が来てくれた。これから二ケ月共に山に登る友である。

めんどうな手続も済みカルカッタ、ハウラー駅から荷物を荷車積し、1等席にもたれて私と村上をのこす全員が出発して行った。ただ一人先発隊として西北インド鉄道の最終地点のタナカプールに行っている寺阪と合流し、そこから、さらに密林を二日横切って自動車の終点であり、インド文明の終点でもあるピトラガーフに、クリー（人夫）を集めに行く様、ガルツエンと寺阪にたのみ、隊長と埴西は荷物のピトラガーフ集結を行った。

私は残務を済ませ一人で本隊の後をおった。野象が歩きラクダの隊のみえるインドの平原を西北にむかって二日走った。4人一組コンパートメントの1等車には、シヤワーWCが別室に付いており、頭の上で 6台の扇風機がまわっている。窓の枠はさながら、鉄格子の暗室の様だ。この大平原の砂ぼこりに歯ぎしりしながら、タナカプールの最終着駅に着き、本隊と合流した。

これから密林を通りチベット的な大平原の高台に上り、さらにカリ河の国境線を、チベットへと行かねばならない。このキャラバンでは実に様々な事象とか民族民芸に接した。そうして白と黒のあの露骨できびしい氷の山へと行ったのである。（遠征隊副隊長・大町市北原町）

サクラソウの一種

夏山を顧りみて

針ノ木小屋

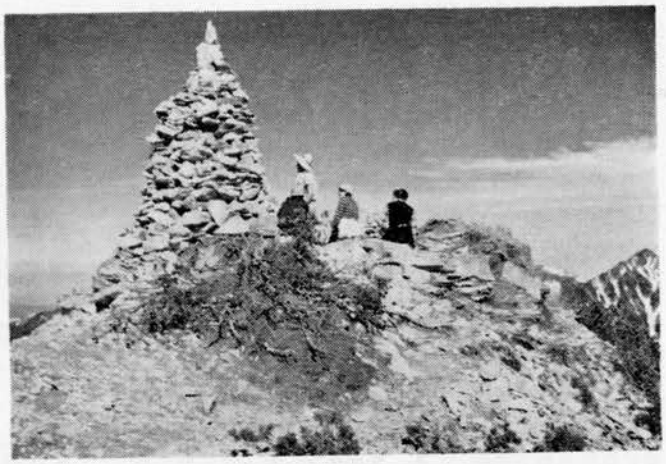
小日向忠夫

ここ数年来わたくしの夏は針ノ木で始まり針ノ木で終る。

六月末日の小屋開きから、八月末日の小屋仕舞いの日まで、まる二ケ月間針ノ木小屋で小屋番をさせていただいている。

夏も終り家に帰ったわたくしは、過ぎ去った夏を時折日記を開き思い出す。

二ケ月とはいえ、今年も数々の思い出がある



針ノ木岳頂上

六月二十六日

小屋開きの日、早朝小屋主のMさん宅へ向うめずらしや、まさか今年はと思っていたK氏の顔がみえる、「どうもこの季節になるとどうしても我慢出来なくてね」と授業も一週間程エスケープしたとの事。

L氏、T氏、の顔がみられぬのが淋しいが。

L氏は教育実習の終り次第七月半ばには来る由、T氏もその頃。

心配した雨（遺憾ながら、針ノ木の小屋開きの日は雨天が多かった。）もなく、スムーズに仕事がはかどる。丁度今日はサマースキー大会とかち合い、二、三の友人に会う。それにしても雪が例年より少く、八月に入っての飲料水のことが懸念される。

峠の小屋まで大勢でボッカし、我々六人の小屋番を大沢小屋に残し皆帰る。

急に寂寥感が身をよぎる。

六月二十八日

大沢小屋の整理も一段落ついたので、峠の小屋を開きにK氏と登る、今夏はじめての客あり、相憎野菜のボッカが遅れていて味噌汁の実に困ったが、ふと山菜を思い出し例年の場所へ取りに行く、季節が少し早いので心配したが、アザミが五、六センチに伸びていて助かる。

客は明朝五色までとの事、しばし談話の後明日の晴天を祈り床に入る。

七月十日

登山客の訪れは、今日頃からと思っていたが、今年は六月のうちからほぼ毎日泊り客がある。最盛期の混雑をさけ静かな山登りを楽しみたいとの事。今が一番よい時咲く花の数も増し、見渡す山並も夏の装を整えた感あり

七月二十日

大沢小屋に居るB氏よりラブレターあり。

文面に曰く、「……前略……このところ、大沢支店泊り客も少く暇にまかせて料理三味にふけりおりましたところ、その罪の報いで。小生昨夕より厳かなるシンホニイを奏ではじめ、今朝がたクライマックス、今、夕闇せまる頃漸く第三楽章も終り、終曲に近づきつつあるも、大演奏の後故、その身思うにまかせず……云々……」

B氏シンフォニイを奏でるのもよいが、「運命」にならぬようにと返信をかく。

七月二十四日

一ノ越よりの善光寺さん（夜も遅く牛に引かれるがごとく来るお客さんを呼んでいる）四人あり。

この客人、得々として今日の行程の辛らさを先客に語る「無理な行程は事故のもとですよ。」

と言ってみたが、今日の鍾かしい（？）興奮さめやらず、「いや、大丈夫ですよ、わたしたちは慣れてますから、」ときた。なにが大丈夫なものか、他人がみてさえ分る彼等のバテ方をその本人が気がつかぬとは、こいつあ重症だ。

八月十日

毎日の事ながら、客を送り出した後のなにかほっとした。またなんとなく物淋しいその空虚さを、断片的に思い出す過ぎ去ったその日、その日の人恋しさでのみ紛わす自分。

朝の一時、今日はハイドンの弦楽四重奏曲「日の出」を耳にし、欲をいえばコーヒーのほしいところなれど、

番茶に紫煙をくゆらせいくばくかのムードをつくる。

八月二十五日

すでに客数も減り、静けさを取りもどした峠、あの見事な紫色を誇っていたトリカブトにも衰えの色が見え、ナナカマドの紅葉が目だちはじめた。

九月三日

小屋じまいの前日、最後の客がドイツ人一人、富山から五色を径て来た由、日本語が全々話せず仕方無くT氏とうろ覚えの独語で話してみたが、発音が悪いのかさっぱり通じない。結局これも怪しい英語と混ぜ合せて漸くどうにか。

明日は大町へ下るとの事、疲れたとみえてすでに高鼾ではごゆっくり、Gute Naht!

九月四日

小屋じまいの日、峠吹く風も秋めき夏の終りを告げるかのよう。

二ケ月の山生活を終え、つつがなくすごせた仕合せを胸のうちに、針ノ木の小屋を後にする。

（針ノ木小屋小屋番）

烏帽子小屋

上条鉄一

裏銀座縦走路の基点、烏帽子小屋が建設されたのは大正13年8月である。又大正15年8月には三俣蓮華小屋が新設されようやく裏銀座縦走が完全にできるようになった。

当時は山を訪れる人も少なく一夏に100人を越えるようなことはなかった、だから山小屋を経営しても、採算があわなかった。昭和の7、8年頃からようやく登山者も増して来たと思った頃、戦争がはじまり、それと共に又客足が少なくなって行った。小屋番といっても、お客のない小屋番はヒマなもので、薪を取りに行ったりしてノンビリしたものだった。

終戦後になって、ポツリ、ポツリと客が増して来、今では大変なもので、どこの山小屋でも増築、増築で多忙のようである。

うちの小屋も、最盛期には既設の建物では間にあわぬので幕舎を作って入り切れない分をまかなっている、来年度には新築をしたいものと思っている。又烏帽子に登るまでは、ブナ坂があり、時速1キロといわれているアルプスの三大登りの一つに数えられている。濁沢から6キロの道に水がないのが又苦労の一つである、だが2200メートルの三角点より少し下れば清水が流れ、口の渇いた時の一口は終生忘れがたい味がある。

うちの小屋は稜線え出ればすぐ下にあり眼前にと薬師赤牛が広がっている、又前烏帽子までの道にはコマクサが咲きいて、ダケカンバ、ツガなどの枝ぶりが面白く烏帽子庭園などと呼んでいる。それも7月には南沢までの間にたくさんの池がそれらのかげに出来るので、何んともいわれない味がある。又裏銀で有名なのに遭難がある。毎年登山者が増すと共に2件や3件は一夏にある。天候の悪い中を止めるのも聞かず無理をして出かける、装備が軽装で、ハイキングの様な気持で来る。裏銀は天候さえ気をつければ遭難を起すような縦走路ではない、山を楽しみに来るのは大変結構なことだと思うが、自分の命の方も大切にしてもらいたいと小屋番をしていてつくづく思う。

又友達と一緒に山に来て、友達がへばってしまい、そのまま自分だけ小屋にたどりつき、友達は死んでしまった。翌日一緒に行って友達の変りはてた姿を見ても一向平気で、その時の状況を説明しいかにもしかたないと云うような態度でいるときには、ぶんなぐってやりたいような気もし、死んだ友人には気の毒な様な気もする。こんな友達と一緒に来た日には、安心してザイルを結ぶなんてことは考えられない、山に来る人も変れば変ったものだと思う時もある。

秋の客の少ない時に夕飯後、小屋のいろりばたで、お客と話しをすることもある。今の山小屋は山の味を楽しむなどということはなくなったと、なげく客もある。

いろりばたで、お茶をのみながら、山菜の話しに、つりの話しに夜のふけるのも知らずに話した昔がなつかしい……今の小屋は何んでもかでも事務的につめこまれ山の味が半減している。そして静かな、本当に山小屋の味のある小屋は少なくなって来た……と。

これは時代の流れで、しかたもないような気もするがそう云われてみると、何んだか昔の小屋の時のことなどを考えさせられ、なにか来る客にもゆったりとしたところが多かったように思う。

今もお茶をのみながら原稿を書いていると、いろいろと昔のことが、思い出され、何から書いて良いやら、と思いだすまま、感じたままに書き留めた。

（烏帽子小屋主人）

思い出の秋山

平林武夫

快的な秋山

白馬三山に初雪が来たという話を聞くのはたいてい9月下旬から10月初旬である。その年も（多分昭和13年頃）幾分早目の初雪の訪れをきいては矢もたてもたまらぬ衝動にかられて同行5名で遠見の尾根をめざして登った

丈なすすすきやぶをこね分けて朝霧にぬれ乍ら登る山路もまた快的であった。あけびやぶどうの熟れている山腹で昼寝のゆめを楽しみ乍ら遠見小屋へ着く。何はともあれ火をたきつけて、やかんに一本注ぎ込んでおかんを温める。はるかに白馬三山は薄化粧の新雪におおわれている。夕刻ともなれば気持よい肌寒さを感じて来る。その程度の寒さに丁度似合いの酒のかんがつき、路々採り集めて来た雑きのこの味噌汁がまた何ともいわれぬ秋の味を感じさせてくれる。

呑むほどに酔うほどにいゝ気持になって炉端にごろりと横になる。そこへふとんを引っ掛けて朝までぐっすり岩ひばりやら、みそさざいやらが鳴き出す頃は酔い覚めの水をほしくなる頃、丁度東の空から御来光という時間何んと山はうまく出来ていることかと思う。

本当にくったくなき山小舎の一夜は明けて快晴の秋の空の下を満山紅葉の遠見の尾根筋を登る。左はるかに鹿島槍の北壁の下にカクネ里のカールがのぞまれる。北アルプスの氷河地形でもっとも低位置にあるカール地形である。その底から北壁の岩壁を見上げて行くと実に素晴らしい岩壁である。しかもその上に新雪がふりかゝって一層すご味を増している。五竜の姿もいゝし八方尾根の牛の背のような山肌をへだてゝ見る白馬三山の姿は尚更よい。

一泊或いは二泊の快的な秋の山旅を試みるならば私は有無をいわずに遠見尾根をおすすめする。

辛苦の秋山

少し空は曇っていた。秋の空だ、降るような時は降らないもの、晴れた時の方があとは必ず降られるもの、というような甘い天候の見かたがまづかった。高瀬入りを登りつめて第五の貯水池辺りでは本降りになって来た。まゝよ今宵一夜はこゝで御世話になりましょうと水番の社宅に泊めて貰う。そこはまた山の中のこと訪れる人を珍らしくもてなしてくれる御主人の好意に甘えて風呂上りで一杯、山菜のつけ物、岩魚の塩焼き、いやまことに山の珍味でおもてなしを受ける。

朝起きてみると高瀬の谷は一面の霧、大ぶ寒いが天気は大丈夫だろう。

燕岳の頂上を越して中房泊りというのがその日の日程人通りの少いコジ沢を登り初めた。燕岳だなんといって馬鹿にしてはならない。高瀬へ向って流れる沢の深いこと又復雑なこと、急峻なこと、漸く雨のしづくにぬれた藪くぐりを抜けて山腹にかゝると昨夜の雨は山では雪、最初はべた雪であったのが段々と雪量も多くなり第一困ったことはあやしげな山道が雪でどこかえ消え去ってしまったことだ。まあどうにか感で新雪を踏み分けては登ってみるものゝすぐ壁に突き当ってしまう。又引きかえす、何とか進路をさがし出す。又突き当る。漸く熊かかもしかの通ったあとに出合う。人間だって這えば熊位のもんだ。熊の通ったあとを人間の通れぬことがあるもんかと這い出してもみる。雪はすでに胸まである。ラッセルの交替もなかなかのこと、漸く夕刻の空模様は一入寒気が強くなる、腹をこしらえて元気づけ乍らともかく尾根筋をさがす、すでに時間は午後七時をまわっている。しかし雪あかりでそう暗くもないのがもっけの幸、やっとのことで這松の尾根筋に出る、尾根筋はるかに燕岳の頂上の岩が見える、その時の嬉しかった事、しかし頂上まで二時間の新雪をかき分けて登ったのは辛った。

困ったことは燕山荘には泊れず仕方なしに中房に下るべた雪のあの栂林の中の暗夜の道を想像され度い、滑っては転び起きては転び、よくも人間の身体というものはこわれてしまわないものだとつくづく感じる。

中房へ着いたのが午前一時、辛苦の秋山であった。これも昭和12年頃か。

（大町第二中学校長　大町山岳会長）

燕　岳　　赤沼千尋氏撮影

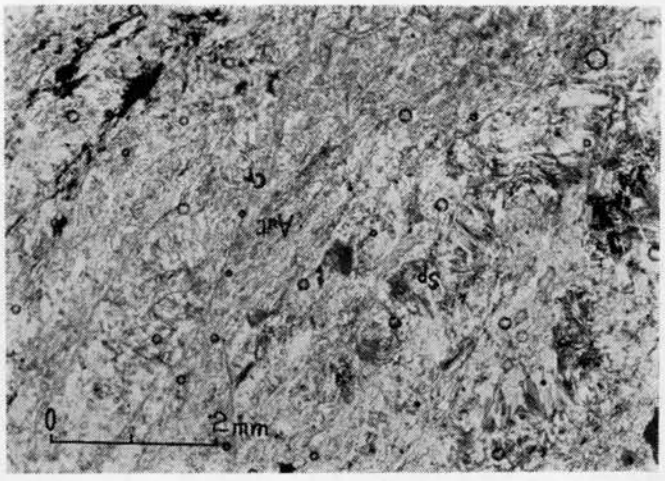
岩石薄片の顕微鏡観察

大町附近の岩石(2)

蛇紋岩(SERPENTINITE)

太田昌秀

今度は大糸線を北へ向って進んでみましょう。四ツ谷附近では、平川と松川の鉄橋を渡ります。この河原には、真白な石が半分位であとは黒つぽい石ばかりで。河原の砂も灰色がかゝています。この黒っぽい岩石のなかに緑や青味がかゝつてねっとりとつやのあるなめらかな石があります。これが蛇紋岩です。平川や松川の上流の八方山や大日向山、栂池附近などは、蛇紋岩からできていて、花崗岩の白い峻しい山とちがって丸くずんぐりしたゆるい山を作っています。もっと北へ行くと南小谷から平岩にかけての大糸線沿線に沢山の蛇紋岩があります。雨の降るたびに地滑りで大騒ぎを起していますがこれはほとんど蛇紋岩のしわざです。



八方山の蛇紋岩

八方山へ登ったら足元の岩石に注意してみましょう。表面にぶつぶつがある黒っぽい岩石ですね。手にとってみると重い感じがします。これは、花崗岩(みかげ石)などの白っぽい岩石に比べて、蛇紋岩は比重が大きいからです(花崗岩の比重=2.7, 蛇紋岩の比重=3.0 以上)ハンマーでたゝいてもなかなか割れませんが、けっして堅いのではなくて、柔かくねばっこいのです。だから山靴の鋲でこすっても、すぐにすじがつきます。八方山で雨にあった経験のある人は、誰でもあの赤土のぬるぬる滑る道を想い出すことでしよう。蛇紋岩が風化するとあのような水を吸いやすい粘土ができて、雨や雪解けの水が沢山あると、ずるずる滑るようになります。だから蛇紋岩の多い地方には地滑りが多く、トンネルなどの土木工事をするときには、掘るはじから滑り出して崩れてしまいますので、蛇紋岩は土木屋さんに一番きらわれています。

顕微鏡でこの岩石をみると、細かい小片状の鉱物がいっぱいに組み合っています。これは蛇紋石という鉱物で水を含んだマグネシウムや鉄の珪酸塩です。この外に緑泥石とか角閃石などが含まれています。これらの鉱物もみんな鉄やマグネシウムの含水珪酸塩です。この岩石の別の部分で、比較的固い部分を顕微鏡でみると、カンラン石や輝石のような水を含まない鉄、マグネシウム、カルシウムの珪酸塩鉱物がわずかに残っていることがあります。そのことから、この蛇紋岩は、もと水を含まない鉱物からできていたと考えられます。このよなもとの岩石をカンラン岩といいます。この岩石は鉄やマグネシウムやカルシウムを沢山含んでいるので、岩石の中では最も重いのです。これに比べて、花崗岩は石英や長石(アルカリ金属のアルミナ珪酸塩)からできていますので、重い金属元来は少く、比重は小さいのです。

白馬岳のお花畑では、よく注意してみると蛾石がみつかることがあります。このやわらかい鉱物も蛇紋岩の中に含まれているものです。本来、水を含まなかったカンラン岩が、熱い水溶液にさらされると、カンラン石や輝石が分解して、水を含む角閃石や緑泥石に変化します。これを蛇紋岩化作用といいます。

地球は、表面に近いところの数十Kmが花崗岩層という比重の小さい岩石の層で作られています。この下は、玄武岩層とか、カンラン岩層とか呼ばれる比重の大きな層があります。蛇紋岩の元になったカンラン岩は、この深い層が溶け出して地表近くまで上ってきたものだと考えられています。ですから、カンラン岩は非常に深い断層がある地域などにしばしばみられますが、日本では極く珍らしい岩石です。皆さんもどこかで聞いたことがあると思いますが、大町は、フオツサ・マグナという糸魚川一静岡を結ぶ大きな断層の上にあります(この断層は日本を東北と西南に分ける大断層です)。八方山や北小谷の蛇紋岩もこの大断層に沿って迸入した岩石なのです この地域の外には、島根県、鳥取県の日本海側と、北海道の日高山脈の西に沿って分布するだけです。この岩石は、クロームやニツケルの鉱床を伴い、白金を産するので貴重な岩石です。磨いて建築材にすると暗緑色の落着いた美しい色調の岩石です。

(北海道大学理学部地鉱学教室)

アカシヨウビン

長沢　修介

山林の溪谷や広葉樹林、杉林などの良く繁った所に棲息しているこの鳥は入梅時や初夏の頃「キヨロロー」と長くさえずる。その声は何とも美声である。背面は紫色の金属光沢のある赤栗色をして腹面はやや淡く、大きな嘴と脚で赤くきわめて派手な色彩をした鳥である。緋色の全身をもつので緋鳥、狸々などの方言もあるが東北地方では唐辛子のことをナンバンといいこの鳥の体色が唐辛子に似ているところからナンバンドリとも言われる。又雨乞鳥、水乞鳥の別名もある。この別名は梅雨期の雨の降る様な天候の時に良く囀るので出たのであろうが水乞鳥は伝説からも来ているようである。その伝説は、昔、親不幸な娘が母親の死ぬ時に最後の水を与えなかったのでこの鳥に生れ変り、水が欲しくて水際迄行くと緋色の自分の体が水にうつり、そしてその水が火になってしまう。そのためいつまでも水がのめず「キョロロー、キョロロー」とないては水を乞うのである。

梅雨時の雨のしとしと降る日にはたしかに良く囀る。緋色の大きな嘴を真直にのばし一直線に樹間をぬって飛び、木の枝に止っている時は尾と体を上下に振る習性がある。湧水地や小溪流でサワガニ、アオガエル、小魚を取って枝にうちつけて殺して食べる。食べる時には丸のみにするのでしばらくして不消化物はペリットとして吐きだす。樹洞や崖地に穴をほって白色のピンポンに似た卵をうむ。

北ア夏山反省会行わる

北アの夏山シーズンも一区切つき、秋風が身にしみる9月20日、大町市観光課主催で夏山の総決算とも云うべき〃夏山反省会〃が各関係者60名を集めて行なわれた。今年の特徴としては、今迄は余り知られなかった〃雲の平〃方面を訪れる人が多くなったこと、登山者の中で女性が 3割を占め、又女性の単独行が目だって来たことである。大町の観光協会が調べたところによると、今年北アを訪れた登山者は、裏銀座方面が9533名、鹿島槍が3500名、針ノ木が7200名となっている（本来の数字はこれを上廻る）今年は天候に恵まれたにもかかわらず 7件の遭難が起り7名が死亡、1名が重傷を負っている。又ガイドも近来になく 350人が登山者の案内をしている。

その後分科会に別れ次の様なことが要望された。

遭難対策として、遭難救助には地元の山岳団体が、連絡、通信には警察が当り、更にはスイスの山岳警察のような態勢にしたい。

又今現在はガイドと警察が救助に当っているが難かしい岩場などは地元山岳団体と提けいして当りたい。救助の場合医師の派遣が手間どったが、常時派遣出来るような山岳医師の出動態勢をととのえておきたい。

冬山遭難の救助のために冬山装備を備え何時でもガイドに貸出して出動できる態勢にしたい。

北ア裏銀座の遭難が多い、水晶岳に小屋が建設中（昨年の台風で倒かい）であるが更に遭難防止の意味からも野口五郎岳に避難小屋を備えてもらいたい、今迄の連絡も烏帽子、三俣蓮華 2小屋の電話も松本局中継のため遅れていたので大町直通の電話にしてもらいたい。登山者の受入には万全を期し、針ノ木などの雪渓は刻々と変形するためベニガラ等をまいて道をはっきりさせたい。登山者が増すにつれて近来特に山小屋周辺の汚れ方は目に余るものがある。これは厚生省が積極的にキャンパーのために便所、水場等を造るべきだ。

山麓の受入れとしては、朝早く着いた人のために早朝食堂を開いていきたい。

お願い　本紙の購読ご希望の方は**1カ年購読料170円（郵送料とも）**を現金書留または**郵便替為、郵便切手**で**長野県大町市、大町山岳博物館**あてご送金下さい。　**大町山岳博物館**

山と博物館　第5巻第9号　1960年9月25日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所　大町市上中町
信州印刷大町工場